連載

第3回

会計史という世界を歩く

三光寺 由実子

フランス・リヨンの毛織物業者の会計帳簿（1320-1324）の研究

テンプル騎士団の会計帳簿を研究した後、実は少しスランプのようなものに陥った。博士論文を完成させるためには、何か新しい研究史料が必要である。日本でもいくつかの中世フランス商人の会計帳簿は入手できた。が、ピンとくるものがないのである。

そこで日本の会計史の専門書の中で、たった数行だけ触れられていた、フランスのローヌ県の県都、今日、美食の町としても有名なリヨン（Lyon）の、毛織物業者の会計帳簿（1320-1324）を追い求め、思い切って、直接古文書館を訪れた。

やっとのことで、閲覧できた会計帳簿はわずかに2枚の大きな紙片（裏表2ページ分、したがって4ページ分）と1枚の破損部分の多い紙片であった。しかも、そのリヨンから少し離れたヴィエンヌ（Vienne）で同じ会計帳簿内にあったはずの7枚の紙片があるのが後で分かり、史料を見るべく再度渡仏したというおまけつきである。

ともあれ、なんとかかき集めた、会計帳簿の断片は、当時リヨンにおいてさかんに行われた毛織物業を営んだ商人たちの会計実務の英知をまざまざと見せてくれるものであった。

彼らの帳簿は、主に債権（一部債務）を記載したものであり、特徴的なのは寸法が縦約40cm、横30cmほどある紙片の真ん中に縦線を入れ、記録を区分けしているものが見られた。特に工夫されているものは、取引先ごとに、左欄で債権の発生・右欄でその回収を表示していた。こうすることで、自分たちの債権のうち、誰に対するものがいくら回収でき、またいくらが回収できていないかが一目瞭然なのである。そして、回収が完了した債権については大きく×印を入れている。視覚に訴えかけるような債権記録は、生きる時代も場所も違う筆者にも理解しやすいものであった。

むろん、それは複式簿記でなければ、複式記入ですらない。ただし、簿記の用語でいうところの「人名勘定」は生成していたのではないかと筆者は考える。

そこで以下、多くの先行研究、特に、泉谷勝美［1997］『スンマへの径』（森山書店）をはじめとするイタリア会計史研究で議論がなされてきた「人名勘定」の歴史的な意義について述べたい。

そもそも、古くから証拠性の高い文書としては、公証人がラテン語で作成した書類、つまり公正証書が重視されていた。しかし、取引関係が継続していくと、商人らが取引のたびにわざわざと、公証人の面前に出頭し、公正証書を作成してもらうことは、極めて煩雑になる。

そこで商人や銀行家、特に、経済活動が栄えていたイタリアのそれらは、公証人の記録方法を模倣しだした。自身が公証人であるかのように、客観的な三人称表現でかつ、日常的に用いる話し言葉で取引事実を顧客別に記帳し始めたのである。彼らは、この顧客別記録を「勘定」と称し次第に、この「勘定」は、公正証書と同等の社会的信頼性が付与されるようになった。このように、勘定は会計帳簿の中で、顧客別貸借とその決済に関する記録・計算単位として、証拠記録となることを意図し、「人名勘定」として生成したのである。

リヨンの毛織物業者の簿記、確かにそれは複式簿記ではない。他方で今日的には「人名勘定」と呼ばれる簿記技術は既に存在し、巧みに債権債務の管理を行っていたのではないかと筆者は考えている。

〈和歌山大学経済学部 准教授 博士（経営学）〉

わだい浪切サロン 第128回

国際化時代の日本語教育・日本語支援
- 大学と地域の連携 -

話題提供者　長友　文子（和歌山大学国際連携部門長・教授）
日　　時　7月21日（水）19:00～20:30
オンライン講演会　/　参加無料　/　申込必要　/　100名限定
申込は左記QRコードからご登録ください。※申込は15日|火|17時まで
問合せ先　和歌山大学岸和田サテライト　TEL・fax 072-433-0875

申込はこちらから